鳥影

泉鏡太郎

青空文庫

雨の晴れた朝である。修善寺の温泉宿、――館の家族の一婦人と、家内が桂川の一本橋向うの花畑へ連立つて、次手に同家の控の別荘――あき屋である――を見せて貰つた、と言つて話した。花畑は渡つてからだが、橋を渡返して館の外まはりを※つて行く。……去年の春ごろまでは、樹蔭の徑で、戸田街道の表通りへ土地の人たちも勝手に通行したのだけれども、いまは橋際に木戸が出來て、館の構内に成つた。もとの徑を、おも屋と隔てて廣い空地があつて、追つては庭に造るのださうで、立樹の間に彼方此方、石が澤山に引込んである。川に添つて古い水車小屋また茅葺の小屋もある。別荘はずつと其の奥の樹深い中に建つて居るのを、私は心づもりに知つて居る。總二階十疊に八疊の※り縁で、階下は七間まで數へて廣い。雨戸をすつかり明けて見せられたが、裏の山、前の流れ、まことに眺望が好いと言ふ。……借りるつもりか、さては近頃工面がいゝナなぞとおせきなさるまじく。京の金閣寺をごらうじましたか、で見ぶつをしたばかり。唄の床柱ではないが、別荘の庭は、垣根つゞきに南天の林と云ひたいくらゐ、一面輝くが如き紅顆を燭して、水晶の火のやうださうで、奥の濡縁を先に古池が一つ、中に平な苔錆びた石がある。

其處で美しい鳥を見た。

二羽。

「……それは綺麗な鳥なんですよ、背中が青いつたつて、唯青いんぢやあないんです、何とも言へません。胸の處からぼつと紅くつてね、長い嘴をして居るんです、向合つて。……其處いらが靜で、誰も驚かさないと見えて、私たちを見ても、遁げないんですよ。縁から其處に――最も、あゝ綺麗な鳥が、と云つて、雨戸にも密と加減はしましたけれども。……何と云ふ鳥でせうね。内の雀よりはずつと大きくつて、鳩よりは、すらりと痩せて小形な。」

と、あゝ、およしなされば可いのに、借りものの籠に、折つて來たしぼりの山茶花と白の小菊を突込んで、をかしく葉を撮んだり、枝を吹いたり、飴細工ではあるまいし……對をなすものの人がらも丁ど可い。……朝餉を濟ますと、立處に床を取直して、勿體ないと障子をしめて、長々と掻巻した、これ此の安湯治客、得意の處。小春のお天氣に、水を二階まで輝かす日當りのまぶしさに、硝子戸「宿の方も知らないつて言ふんですがね、ちよい〳〵彼處で見るんですつて、いつも、つがひで洒落れてるわね。何でせう。」

おや〳〵鋏の音をさせた。あつかましい。が、此にも似合はう……川柳の横本を枕と斜つかけに仰ぎながら、

「あるきもしない、不精だ不精だと云ふけれど、居ながらにして知つてるぜ。かはせみさ、それは。」

「あゝ。」

「字に顯はすと、些と畫が多い、翡翠とかいてね、お前たち……たちぢやあ他様へ失禮だ……お前なぞが欲しがる珠とおんなじだ。」

と云つて、おねだんのものの何にも插さない、うしろ向の圓髷を見た。

私は廣袖の襟を合はせて起きた。

鴛鴦は濃艶でお睦じい、が、聞いたばかりで、翡翠は凄麗にして、其の所帶は意氣である。見たくなつた。

私は狩獵を知らない。が、獲ものでない、山の幸は、其の姿を見、その、もの語を聞くのにある、と、思ひつゝ。……

昭和三年一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。
※表題は底本では、「鳥影《とりかげ》」とルビがついています。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2011年8月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳥影

泉鏡太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/